

愚者

極愚

愚蒙^も愚極自謂^い我智 愚昧、愚極にして、自ら我は智なりと謂ふ。

愚而勝智是謂極愚 愚にして勝智というは、是を極愚と謂ふ。(法句經)

一切のまちがいはここからおこる。

愚蒙^も愚極……至れりつくせりの愚者が、我は智者なりと謂う。愚にして勝れた智者であると思うことが極愚なるゆえんである。一切のまちがいはここから起る。

教育の少しも受け、口の少しも動き、小才の少しもきくと、すぐ天晴れ智者の如く気取つて、自分は智者である、自分だけは認識の正しいものである、自分のしていることにはまちがいはない、他人がやっていることはすべて間違っている、こう考えはじめるに至つて、愚はその極致に至り、極愚とよばれるのである。

聖者は

極愚は、愚を知らずして、我は勝智なりと思う。真の愚者は愚を知らないのである。更に言えば智者と考えている者こそ愚者であり、真の智者は必ず愚を知るのである。

比叡山天台の嶺を開いた伝教大師は、入山自誓の願文において、

「是に於てか、愚が中の極愚、狂が中の極狂、塵秃の有情、底下の最澄、上は諸仏に達し、中は皇礼に背き、下は孝礼に闕げたり。」

と告白せられた。傳教大師は台嶺の静寂にあつて、静かに、愚が中の極愚、狂が中の極狂と観じ、塵秃の有情を名告り、煩惱にまみれたる自分を投げ出して、底下の最澄と言ひ、上は請仏の道に違背し、やがて、上御一人に対して忠節に背き、父母に対して孝礼をかぐる、不信、不忠、不孝の自己を懺悔したもうたのである。しかして天台の末流漸く濁つて、徒らに名利を貪る俗流、権力暴力を弄んで神聖なる霊場たるを失ふの日、やがて、大地に、愚痴の法然房を生み、愚禿親鸞を誕生せしめるに至つて、正しく伝教大師の真精神が大地に復活したのである。愚を知ることとは聖者の通規であつた。

愚禿

聖人の生きたもう道は、愚者が愚者と知つて、如来本願に救われる道であつた。されば和国の教主として、救世觀世音の御化身として、父の如く母の如く崇仰したまいし聖徳太子の生活にならつて、瞰肉妻帯を断行し、あくまで非僧非俗の愚禿と名告り、地獄一定と無明をついて、そこに、如来の無量光に更生して生きられたのであつた。

「悲しき哉、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真證の證に近づくことを快しまず、恥べし傷むべし矣。」

と愚禿の自証は念仏の一生を貫き、「真実の心のありがたき」に泣き、「虚仮不実の我が身」を歎き、「是非知らず、邪正もわかぬこの身」であることを示し、「いづれの行も及びがたき身なれば地獄は一定すみかぞかし。」と深信せられた。しかも、かかる懺悔はそのまゝに

「慶ばしき哉。心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、良に師教の恩厚を仰ぐ。慶喜いよく至り、至孝彌重し。」
と、そこに、愚禿のみが知る絶対安住微塵の疑い不安なき天地があつた。これしかしながら、すべて如来智慧光の然らしむる所であり、大悲矜哀のすべての賜であり、師教の恩厚によるのである、と讃歎せられた。

我等の正体

我等は如来を知らぬ限り、賢者であり、善人である。右するもそれを正と肯定し、左するもそれに是を主張し、念々の歩みが、病蚕の如く病毒の膿血を人にぬりつけようと、それをば知らずして、あくまで直接に己にのみ正しさを主張して堂々たるものである。かかる善人の集る所、そこには必ず嫌な諍いがはじまる。醜悪さが増せば増すだけ、いよいよ迷路まい進して、しかも迷路を迷路と知らぬのである。我等の生活こそ実にそれではないか。平和なる天地に入つて、烏賊の如く自ら墨をふきて、人を暗黒ならしめ、かえつて暗黒や醜悪を他人にぬりつけて、しかも自らは正義の名によつて去つてゆく。それがまことに、極愚を極愚と知らぬ我等の正体である。

名利

四十二章経に曰く

「仏曰く、人、情欲に随つて華名を求むるは、誓へば香を焼き、衆人その香を聞けども、然も香の以つて薫り、自ら焼たるが如し。愚者は流俗の名誉を貪り、道真を守らず。華名は己を危くするの禍なり。その悔ゆるは後の時に在り。」

まことに愚者の唯一の生命は名誉である。いたずらに名を求めて、道真を守ろうとはしない。名のためには睡眠猶減ずべし、粗食猶忍ぶべし。更に時には一切の富すら離れ得べし。あるいはついに命すら投げ出して守ろうとし、得ようとするのが名誉ではないか。しかも仏はこの名利の心をもつて、迷妄の情欲であるとし、愚者の相であるとせられる。

源信和尚はすでに十五歳にして、この愚を慈母の巖まことによつて知らしめられて、やがて横川楞嚴院の聖者となり、我が親鸞聖人は、愚禿と名告つて廣野に下り、如来の智慧光によつて、この最後の悪魔の誘惑に勝たれた。「悲しき哉、愚禿、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して」と自覚せしめたものは、全く如来大悲撰護のすべてであり、信心の智慧による自覚である。もし聖人にして、第一義の問題を忘れて、叡山にあつて、大僧正を目指し、天台座主に憬れ、慈鎮和尚と共に、和歌の名字とうたわれんことを求められたとすれば、日本の文化史はどうなっているであろうか、否日本それ自身がどうなっているであろうか。

衆生と共に

その時代の社会相をながめて、悲憤慷慨することも出来る。罵倒非難することも出来る。社会を正しく受け取り、それを批判する眼は大切であろう。しかし、自己を社会から抽象して、自己の愚さに気づかず、悪にさめずして、どこに大衆と共なる歩みがあるう。聖人すでに九歳にして、俗の世界より去りたもうが故に、非俗であり、再び大衆に同ずるが故に、非僧であり、愚禿であつた。

「罪あらば我をとがめよ天津神 民は我が身の生みし子なれば。」

との大御心は、決して民の外に立つて責めたもう心でなくて、民と一体になりきりたもう大慈悲である。

如来大悲は、聖人のうちに、赤き一点の願となり、燈炬となり、魂となりたまひ、藤原の栄華も、源平二氏の戦いも、比叡天台の学問も、それにまつわる名利も、世の一切はこの燈の前に照破されて、求むべからざる浮世の迷相にすぎぬを知らしむると共に、聖人の胸内にすべてを抱かせて、ついに地獄一定、愚禿と名告らしめたのであつた。かくて求道二十年、吉水の法然上人の前に頭が下げられた時、愚禿はついにここに一切衆生の救わるる法の泉に救われたのであつた。

然り、一切衆生の誰でもが救われる救い、それはただ愚なる自己にさめた者にだけ知らされる。否、古往今来、いつでも、どこでも変りなき唯一なる如来に救われてのみ、極愚の我を信知するのである。だが我々は又してもく賢くなる。極愚にして極愚を知らぬ凡夫である。恥しいことである。